

新潟で大学院生として行った 科学コミュニケーション活動

(九州大学 基幹教育院) 小林 良彦

My science communication in Niigata performed as activities of a Ph.D. student
(Faculty of Arts and Science, Kyushu University) KOBAYASHI, Yoshihiko

新潟大学の大学院生有志で行ったサイエンスカフェ形式のイベント「学び合いカフェ」、そして、個人として行った地元英会話教室でのサイエンスカフェについて発表する。発表では、それらの実践に至る経緯および実践から見えた意義について述べる。

新潟大学大学院生有志による「学び合いカフェ」

新潟大学では、大学見学のために来学する中高生向けに大学院生が自身の研究紹介や進路選択の経緯を講義する出前授業活動「サイエンス・セミナー」が展開されている。

筆者はこの活動に参加して、新潟大学が総合大学であることを嘸み締めた。そして、中高生向けに留まらない他分野交流の活動を、自分たちの企画・運営で行いたいと考えた。その想いを「サイエンス・セミナー」関係者に相談し、大学院生有志で「学び合いカフェ」を始めた。

2016 年末までに、10 回の「学び合いカフェ」、2 回の大学祭出展を行った。発表では、その概要および実践報告、そして、課題について報告する。

地元英会話教室でのサイエンスカフェ

筆者は大学院生時代、新潟県内の科学コミュニケーション活動をまとめるポータルサイト「こいがたサイエンスまっぷ」を作成していた。その情報収集の過程で出逢った方の要望で、英会話教室でのサイエンスカフェを行うことになった。2016 年 11 月と 2017 年 3 月の 2 回を開催した。

このサイエンスカフェの特徴は、参加者が英会話教室に通う方々であったことである。つまり、参加者の大半が「科学好き」ではないのである。この点は筆者にとって、貴重な経験となった。

発表では、サイエンスカフェを行った印象と実施から得た知見について述べる。

大学院生による科学コミュニケーション活動の意義を再考する

筆者は、上述した 2 つの活動などから、大学院生が科学コミュニケーション活動をする意義について、再考している。

大学院生は研究が本務である。科学コミュニケーション活動が研究活動への支障になる、という見解があることは事実である。しかし一方で、科学コミュニケーション活動から得るものも多い。例えば、企画・運営の経験やプレゼンテーションスキルの研鑽、そして、非専門家との対話からの学びである。それらの経験は、大学院修了後にも生きるものである。

また、サイエンスカフェは登壇者も参加者から学べる“学び合い”の場である。“学び合い”を促す要因のひとつに「対等性」がある。この「対等性」をどう担保するのか、が科学コミュニケーション活動の課題でもある。そこでは「大学院生が登壇する」こと効果的に働くとも考えている。

研究会当日には、ここで述べた筆者の意見も含め、大学院生(や若手研究者)が科学コミュニケーション活動に携わる意義についても意見交換したい。